

今年度は令和6年4月27日(土)から令和6年5月6日(月)にかけて関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選が行われ、各会場で熱戦が繰り広げられた。優勝は習志野高校、準優勝は検見川高校、3位は東京学館高校、日体大柏高校という結果になった。

【大会の傾向】

今年度はベスト8が全て1部から2部に所属するチームであった。優勝した習志野高校は、準々決勝で同1部リーグに所属する中央学院にリーグ戦のリベンジを果たしている。準優勝した検見川高校は、所属する2部リーグでは3節終了時点で勝ち星をあげられていない状況の中、快進撃をみせた。日常から千葉県上位リーグで鎬を削り合っている経験がトーナメントの勝ち上がりにも繋がっていることが伺える。

また、交代回数・人数の変更に伴い、試合の流れを変えるための選手交代については、各チームが熟考したことではないだろうか。準決勝、習志野高校は後半から出場した交代選手の活躍が勝利を手繰り寄せ、スターティングメンバーだけでなく総合的なチーム力の高さも示した。このような部分もトーナメントを勝ち上がったチームの特徴として捉えられる。

優勝した習志野高校は1回戦から決勝まで全て1点差の試合に勝利してきた。縦に速い攻撃、素早い攻守の切り替え、安定感のある強力な守備陣がバランス良く機能し、ロングスローなどのデザインされたセットプレーも特徴的であった。準優勝した検見川高校は、準々決勝の八千代高校戦、準決勝の日体大柏高校戦と、県1部所属校に対し、ボールを支配されながらも3ラインをコンパクトに保ち、GKを中心とした統率のとれた守備で失点を最小限に抑え、2トップを活かしたカウンターから少ないチャンスをもものにする戦いぶりであった。ベスト4に進出した東京学館は、徹底して縦に速い攻撃スタイルを貫き、相手のストロングを消すことで自分たちのペースを握り続けた。決勝に駒を進めた2チームは、リスクを冒さないシンプルな攻撃の中で、球際の強度、空中戦の強さ、運動量、攻守の切り替えのスピードを保ち、タフに戦い続けることで勝ち上がった。

しかし、ロングボールを活用し手数をかけずに縦に速い攻撃を展開する中で、縦に速くなりすぎることによって相手DFラインの視野の中で容易にクリアされ、効果的なくさびやDFライン背後へのパスが少ないように感じた。インテンシティが高いゲームの中でも、セカンドボールの回収と共に周囲の素早いサポートから、相手DFの視線を変えるために1つボールを動かすことで角度を変え、より効果的な縦パスからチャンスを作れたのではないだろうか。

また、セットプレーから多くの得点生まれ、特に飛距離のあるロングスローが特徴的であった。デザインされたセットプレーに対する組織的な守備構築とルーズボールへの対応には課題が残る。セットプレーが多い反面、アタッキングサードの質についても課題が残る。個での打開、コンビネーション、ワンタッチプレー、コントロール・シュート・クロス、クロスの入り方・タイミングなどを、状況を観て判断し、サッカーの本質である「ゴールを奪う」という部分に日常からフォーカスして取り組まなければならないであろう。

【最後に】

今大会の決勝戦は平成23年以来となる13年ぶりの公立校対決となった。僅差の試合に勝ち続け13年振りの優勝となった習志野高校、関東大会初出場を決めた県リーグ2部所属の検見川高校の快進撃は見事なものであり、改めてサッカーというチームスポーツの面白さを感じた。また、各会場において多くの観客が見守る中、ピッチに立つ選手たちはエネルギー溢れる試合を展開していた。改めてサッカーができることを幸せに感じる。今大会が開催され無事終えられたこと、また、大会の運営に携わっていただいた全ての方々へ感謝の意を表すと共に、優勝した習志野高校、準優勝した検見川高校の関東大会での躍進を期待し、令和6年度関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選会の総評とさせていただきます。